

H28海外臨床実習

渡航先	国立台湾大学
国・地域	台湾

番号	報告者	渡航先機関での 受入期間
1	T. T	H29/2/6-H29/3/3

平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年

T. T

①実習の目的

台湾は日本と同じ東アジア圏内に属する島であり、日本とは人種的にも文化的にも非常に近い国である。医療においても日本と同じく国民皆保険制度が実施されており、台湾の医療を肌で感じることで、日本の医療との相違点を理解し、台湾の医療で優れている点・日本の医療で改善すべき点を実感することが今回の実習の目的の一つである。

また、国立台湾大学病院は外来専用の病院、入院専用の病院、そして小児病院の三つの建物から構成されており、大阪大学とは大きく仕組みが異なっている。その中でも小児医療に興味があったため、小児外科での実習を通して、小児病院の役割を見学したかったのも本実習を志望した理由である。

②実習の内容

外来見学与手術見学が主な実習内容で、他にモーニングミーティング・ランチミーティング、教授回診などにも参加した。医師同士の会話は中国語でなされていたが、頻繁に私に対して英語で解説してくださったのでとてもありがたかった。初めは医学英語が分からずに困ったが、メモを取って復習していったおかげで途中からはそれほど困らなくなった。

③実習のスケジュール

月曜日：12時30分から13時30分 ランチミーティング

13時30分から18時30分 外来見学

火曜日：8時15分から18時 手術見学

水曜日：フリー

木曜日：8時30分から9時30分 モーニングミーティング

9時30分から13時30分 外来見学

14時から17時 病棟見学

17時から18時 教授回診

金曜日：8時15分から18時 手術見学

④実習の成果

まず、外来の仕方が日本とは大きく異なっていた。日本では一人の医者が同時に二つの部屋で外来診察することはないと思うが、台湾大学小児外科の教授は二部屋の外来診察をこなしていた。一つの部屋は教授だけが診察する部屋、もう一つの部屋がレジデントの先

生が最初に診察しそのあとに教授も診察する部屋。教授は自分の部屋の患者の外来が終われば隣の部屋のレジデントが診た患者を診察し、さらに自分の部屋に戻って外来診察をし、それが終わればまた隣の部屋のレジデントが診た患者を診察し、というのを繰り返す。午前の外来で延べ 50 人くらいの患者の外来をしているが、これは台湾の医者の中ではかなり少ないのだとおっしゃっていた。教授は外来の人数を 50 人ほどに制限しているが、制限していなかったら 100 人くらいは診なければならぬそうである。実際にそれくらいの数の外来をこなしている先生も多いそうだ。

カルテは全て電子化されていたが、一番驚いたのはカルテの記載がすべて英語であったことだ。医療用語の記載はすべて英語であり、台湾大学の医者はみな英語に堪能であった。モーニングミーティングやランチミーティングでは、症例発表とその症例に関する論文の抄読、というように日本と同じ構成であったが、パワーポイントのスライドがすべて英語でなされていた。発表は中国語（医学用語は英語）で話し、スライドは英語で書かれているという、二つの言語が入り混じった発表でとても斬新な感じがした。

もちろん医者が患者に話すときは全て中国語でなされているので、私には理解できなかった。しかし外来見学の時は、カルテを見れば英語で書かれているので患者の主訴や疾患、経過などは理解することが出来たし、教授が英語で解説してくれた。外来では、停留精巣、単径ヘルニア、尿道下裂、ヒルシュスプルング病、奇形種、陰嚢水腫、舌小帯短縮症、先天性十二指腸閉鎖症、腹壁破裂、臍帯ヘルニア、ベイカー嚢胞、総胆管閉鎖症、斜頸、類上皮嚢胞、毛母腫、cloaca など典型的な疾患から非常に珍しい疾患まで様々なものを見ることが出来た。術前の外来や術後のフォローアップ、手術にならないが小児外科が見る疾患など様々な患者が外来に来ていた。さらに、停留精巣や単径ヘルニア、類上皮嚢胞・毛母腫の触診を何度も経験したほか、3 週目ごろからは目の前の腫瘍性病変のある患者を診て教授から “What’s the diagnosis?” と試問されるようになった。台湾では停留精巣や尿道下裂の患者が多く、それはエストロゲンと構造が似た環境ホルモンによる影響ではないかと教授は推測していた。

次に手術についてだが、手術室のつくりは日本と大きく変わらないと感じたが、教授が小さいものも合わせて一日に 5 件以上もの手術を行っていた。単径ヘルニアや停留精巣、尿道下裂といった疾患が多かったが、奇形種や神経芽細胞腫、多指症、化学療法中の急性白血病患者の腸穿孔といったものの手術も見ることができた。ほとんどの手術で清潔になって手術を見ることができた。また、肝芽腫の port A removal では、メスや電気メスを使っての皮膚の切開、組織の剥離、そして縫合と結紮までやらせてもらった。

余談だが、手術室は 6 階にあり、そこに入るには 7 階に更衣室がありそこから 6 階の手術室に向かうことになるのだが、7 階には食事室があり無料の弁当とスープが置いてあり、昼になると医者も看護師も学生もその弁当を食べていた。一日中手術をする外科医や看護師にとってとてもいいサービスであると思った。

⑤台湾の医療について

国立台湾大学医学部生の5回生数人がコンタクトパーソンとして私の台湾滞在中の教務手続きの手伝いや観光案内等をしてくれた。その際に、台湾の医療や台湾大学の医学生の医学に対するモチベーションや将来の展望について聞くことが出来た。台湾では国民皆保険のため医療費がかなり安いこと、医学生は成績で診療科を選べること、皮膚科や眼科、美容整形外科といった科が忙しくなく賃金も高く人気であること、医学部の教科書は英語で書かれていること、将来海外で永住して働こうと考えている学生が一学年に数人はいることなど。そして台湾の学生は英語が非常にうまく医学英語のみならず日常会話も流暢に話しており、世界的な視野で物事を考えることが出来ていた。また、私と同じ時期に日本からは東京大学、慈恵会医科大学の学生が留学していたほか、シンガポール、アメリカ、オーストラリア、セルビアなど様々な国の医学生が交換留学生として国立台湾大学で実習していたし、レジデントの中にもシンガポールから留学している先生もいた。このように国立台湾大学は世界中から学生、レジデントを受け入れており、英語での教育体制がかなり整っていて、医学生、医師の英語のレベルの高さは、日本よりも高いものであると感じた。日本も台湾と同じ島国として世界から優秀な人材を集めるには、医学界全体として英語力の強化は必須であると感じた。

⑥今後の抱負

今回の実習では小児外科のバラエティーに富んだ症例を体験し、実践的な経験を積むことが出来た。日本の医療の優れている点を再認識した一方、日本の弱点も感じる事が出来た。さらに、親日的な台湾の学生や他の交換留学生と観光・旅行や様々な話しをすることで非常に仲良くなる事が出来た。お互いに文化的背景は異なっても、英語という手段を通して友人関係を築くことができた。

今後も国際的な視野をもちながら、医学に向き合っていきたいと改めて感じた。

⑦最後に

今回の実習にあたって、和佐先生をはじめ交換留学を準備して下さった教育センターや教務の方々、実習を受け入れて下さった国立台湾大学の先生方、奨学金を支給して下さった岸本先生には本当に感謝しています。本当にありがとうございました。